

Société française de traductologie (SoFT)
フランス翻訳学会 (SoFT)

Recherches franco-japonaises en traductologie
「日仏翻訳学研究」

Journées inaugurales
第1回研究会

Littérature japonaise classique et traductologie
「日本古典文学の翻訳学」

Programme
プログラム

Dates : 2016 vendredi 18 mars 10 : 00 ~ 18 : 00
samedi 19 mars 9 : 30 ~ 15 : 00
開催日時 : 2016年 3月18日 (金) 10 : 00 ~ 18 : 00
3月19日 (土) 9 : 30 ~ 15 : 00

Lieu : Institut de technologie de Kyôto (KIT) Bâtiment commémoratif des 60 ans
開催場所 : 京都工芸繊維大学 (60周年記念館2階セミナー室)

Responsable du projet 研究代表者

Julie BROCK
ジュリー・ブロック

Institut de Technologie de Kyôto (KIT)
京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科

Présentation
概要

Au Japon, les études sur la littérature japonaise ancienne se sont développées à travers une longue tradition à laquelle nous devons une méthodologie particulièrement complexe et sophistiquée. Cependant, la posture du spécialiste est différente de celle du traducteur. D'une part, leurs objectifs ne sont pas les mêmes, et d'autre part ils ne s'adressent pas au même public. Dans notre monde international où le besoin de traduction se fait de plus en plus ressentir, ne convient-il pas d'élargir les études sur la littérature japonaise ancienne, et tout en poursuivant les recherches traditionnelles, de reconnaître également le caractère esthétique des œuvres ? En admettant qu'un poème est un poème, et en l'examinant en tant que tel, c'est ainsi que l'on pourra dépasser le cadre des études nationales traditionnelles, et développer une réflexion véritablement traductologique.

本研究会では、まず長い伝統のなかで確立されてきた方法論に従う、古典文学の解釈学が、日本において大きく発展してきたことを示し、次いで解釈学と翻訳行為のあいだの関係を問う。「解釈」と「翻訳」のあいだの違いはいかに明らかにされ、とりわけ一般の読者の観点から両者の区別はいかに捉えられるのか。国際化によって情報交換が盛んになり、翻訳の需要がいつそう高まる昨今において、伝統的な学問の中心をなしてきた解釈学の仕事を越えて、「作品」の芸術性——詩を詩として成立させるもの——を考慮すること、すなわち真の意味において翻訳学的な思考を追求することが課題となる。

Participants 参加研究者

Julie BROCK ジュリー・ブロック	Professeur, Institut de Technologie de Kyôto 京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科 基盤科学系 教授
INOUE Sayaka 井上さやか	Chercheure titulaire, Nara Prefecture Complex of Man'yô Culture 奈良県立万葉文化館 主任研究員
IWANAGA Taiki 岩永大気	Doctorant, Université de Kyôto 京都大学大学院文学研究科博士後期課程
IWASHITA Takehiko 岩下武彦	Professeur, Université Chûô, Tôkyô 中央大学文学部 教授
KOMAKI Satoshi 駒木敏	Professeur émérite, Université Dôshisha 同志社大学名誉教授
MATSUURA Namiko 松浦菜美子	Doctorante, Université de Kyôto 京都大学大学院文学研究科博士後期課程
NISHIZAWA Kazumitsu 西澤一光	Maître de conférences, Ecole de commerce de Niigata 新潟経営大学経営情報学部 准教授
ÔYAMA Akiko 大山明子	Doctorante, Université de Kyôto 京都大学大学院文学研究科博士後期課程
OGURA Kumiko 小倉久美子	Chercheure titulaire, Nara Prefecture Complex of Man'yô Culture 奈良県立万葉文化館 主任研究員
SHIBATA Yoriko 柴田依子	Membre de la Société d'études du japonisme ジャポニスム学会、東大比較文学会、日 本・国際比較文学会、俳文学会会員
YOKOTA Yuya 横田悠矢	Doctorant, Université de Kyôto 京都大学大学院文学研究科博士後期課程
YOSHIKAWA Junko 吉川順子	Maître de conférences, Institut de Technologie de Kyôto (KIT) 京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科 基盤科学系 准教授

Vendredi 18 mars

Interprétation et traduction de la littérature japonaise classique

09 : 30~12 : 30 Comment interpréter le *Kojiki* ?

Président KOMAKI Satoshi - Modérateur YOKOTA Yuya

3月18日(金) 「日本古典文学の解釈と翻訳」

09 : 30~12 : 30 研究会 「古典をいかに解釈するか—古事記を例に」

司会 : 駒木敏 進行 : 横田悠矢

09 : 30 Accueil des participants
10 : 00 Message de bienvenue Julie Brock
10 : 20 Introduction Yokota Yuya
10 : 30 « Sur la lecture du *Kojiki* par Motoori Norinaga
selon le point de vue herméneutique » Nishizawa Kazumitsu
11 : 15 Discussion
11 : 45 Synthèse Komaki Satoshi
12 : 00 Déjeuner

09 : 30 受付
10 : 00 開会の辞 ジュリー・ブロック
10 : 20 導入 横田悠矢
10 : 30 「解釈学の視点から見た本居宣長の『古事記』読解について」 西澤一光
11 : 15 議論
11 : 45 発表と議論の総括 駒木敏*
12 : 00 昼食

13 : 30~16 : 45

Les traductions de la littérature japonaise classique dans les langues occidentales

Président IWASHITA Takehiko - Modérateur OYAMA Akiko

13 : 30~16 : 45 研究会 「古典をいかに西洋語に翻訳するか」

司会 : 岩下武彦 進行 : 大山明子

13 : 30 Introduction Ôyama Akiko
13 : 40 « Comment traduire la "poéticité" d'un poème ?
- La théorie meschonnicienne du "rythme" » Julie Brock
14 : 25 Discussion
14 : 55 〈Pause 20 minutes〉
15 : 15 La traduction de la littérature japonaise classique dans les langues occidentales ?
Inoue Sayaka
16 : 00 Discussion
16 : 30 Synthèse Iwashita Takehiko
16 : 45 〈Pause 15 minutes〉

13 : 30 導入 大山明子
13 : 40 「いかに詩の詩性を翻訳するか—『萬葉集』の二首の和歌を例に」
ジュリー・ブロック
14 : 25 議論
14 : 55 〈休憩20分〉
15 : 15 「近現代における日本古典文学の西洋言語への翻訳—その歴史と方法論の概
観」 井上さやか
16 : 00 議論
16 : 30 発表と議論の総括 岩下武彦
16 : 45 〈休憩15分〉

17 : 00~18 : 00

Traduire en français ou en japonais les poèmes modernes et contemporains

17 : 00~18 : 00 研究会 「日仏近現代詩の翻訳」

17 : 00 Le rapport entre l'homme et la nature vu à travers les haïkus - Etude sur la traduction française des haïkus par Augustin Berque Yokota Yuya

17 : 30 Sur la traduction japonaise des fables de La Fontaine Ôyama Akiko

18 : 00 Clôture de la première journée

17 : 00 「オーギュスタン・ベルクにおける自然と人間の関係—俳句の翻訳を通して」
横田悠矢

17 : 30 「ラ・フォンテーヌの寓話の翻訳について」 大山明子

18 : 00 終了

Samedi 19 mars

La réception de la littérature japonaise ancienne dans la France du XIX^e et du XX^e siècle

Président NISHIZAWA Kazumitsu - Modérateur Iwanaga Taiki

3月19日 (土) 「19世紀・20世紀フランスにおける日本古典文学」

09 : 30~15 : 00 研究会

司会 : 西澤一光 進行 : 岩永大気

09 : 30 Introduction

Iwanaga Taiki

09 : 40 Les *Poèmes de la libellule* de Judith Gautier - L'interprétation des poèmes d'amour à travers la traduction

Yoshikawa Junko

10 : 25 Discussion

11 : 10 〈Pause 20 minutes〉

11 : 30 Table ronde sur Léon de Rosny

Ogura Kumiko,
Yoshikawa Junko
Nishizawa Kazumitsu

12 : 15 Synthèse

12 : 30 Déjeuner

13 : 30 Discussion générale : bilan et perspective

15 : 00 Clôture

09 : 30 導入 小倉久美子

09 : 40 「ジュディット・ゴーチエ『蜻蛉集』—翻訳にみる恋歌の解釈の差」
吉川順子*

10 : 25 議論

11 : 10 〈休憩20分〉

11 : 30 議論—レオン・ド・ロニについて 小倉久美子、吉川順子

12 : 15 発表と議論の総括 西澤一光

12 : 30 昼食 (弁当)

13 : 30 今後の研究会についての意見交換

15 : 00 終了

発表の概要

西澤一光

解釈学の視点から見た本居宣長の『古事記』読解について

翻訳可能性とは読解可能性、了解可能性の別名である。テキストが読み手に対して「了解の地平」において開かれている限りにおいてテキストは読解可能なのであり、要するに翻訳可能なのである。ところで、日本のエクリチュールの歴史におけるラディカルな変化は、奈良時代までに書かれたエクリチュールを読解不可能なものにした。それでも、『万葉集』については、10世紀に読解の研究が開始されている。これに対して、『古事記』がテキストとして読み得るものになったのは18世紀後半の本居宣長においてであった。古代中世を通じて『日本書紀』が読み解かれつづけたのに対して、『古事記』は宣長以前には読解不可能なテキストでありつづけた。では、いったいなぜ宣長は、『古事記』を読み得たのか。言い換えれば、なぜ『古事記』は、「了解の地平」において宣長という読み手に対して開かれ得たのか。それは、宣長が正しく『古事記』のエクリチュールの本質を理解していたからであり、そのことを示すのが『古事記伝』の「序文」である。この問題に関しては拙稿「文体が生成する場所—「声」と「文字」のくあいだ>をめぐって—」（『古代文学』53、2014年3月）でも触れたが、今回は、言語学、解釈学を含めたテキスト理論の視点から、問題の「地平」を照らしたい。

ジュリー・ブロック

いかに詩の詩性を翻訳するか—萬葉集を例に

この発表では、オーギュスタン・ベルクの「風土学」から「跡」と「母胎」という概念を借りて、注釈者の行うことと翻訳者のそれとがどのように異なるかを説明する。そうして、翻訳者に特異なことは、自らの言語において詩を「詩として」再び作り上げることであり示した上で、そのような美学的観点から、アンリ・メショニックの述べる「主体」の概念について分析する。さて、この概念を定義づけるには、「リズム」の概念から出発しなければならないが、メショニックの『翻訳の詩学』における「リズム」とは、伝統的な五七調などの韻律ではなく、ヘラクレイトスの言う「動き」の意味において、根本的な位置を占める概念である。つまり、ある思考が言葉を通して構成される「動き」を成すものがメショニックにおける「リズム」なのである。ここで言葉というのは、西洋語で「ディスクール」と言われるものであり、それは「話す人」（フンボルトの言う *die sprechenden Menschen*）の表現として定義され、その表現には、バンヴニストが言うように「私」と言う者の印が刻まれている。この現象をメショニックは「最高の主体化」と言い、言葉のリズムや音色や意味のまとまりを作るのはこの「主体化」である。ここでは、『万葉集』の二首の和歌を検討し、一方では、語彙、語法に重点を置く日本の注釈者による解釈が、言葉の流れと思考の動きを妨げる伝統的な対立（意味と形、あるいはシニフィエ（所記）とシニフィアン（能記）など）に基づいていることを示す。そして他方では、言葉の連続性に基づいて翻訳する試みが、詩に映されている世界に向けてのみならず、そこに映る「主体」に向けても新しい視野を開きうるということを示す。

井上さやか

記紀万葉の海外での受容について

第5回奈良県立万葉文化館主宰共同研究「海外における記紀万葉の受容に関する比較研究—翻訳にあらわれる日本文学の特色について」（H26.4～H28.3）の取り組みについて概要を紹介する。

吉川順子

ジュディット・ゴーチエ『蜻蛉集』—翻訳にみる恋歌の解釈の差

本発表では、ロニー『詩歌撰葉』などのアカデミックな和歌翻訳とは一線を画し、鑑賞に重きをおいて制作された、作家・詩人ジュディット・ゴーチエによる和歌翻訳集『蜻蛉集』（1885）をとりあげる。特に、恋歌に焦点を絞り、その翻訳の特徴を分析することで、原歌とフランス人作家による恋歌の解釈の差を明らかにし、その要因や意味を考察する。